識別 総合確認テスト（紛らわしい語ミックス） 解答・解説

問1 ア（完了の助動詞「ぬ」の連用形）。直前「うつろひ」は四段動詞「うつろふ」の連用形。「連用形＋けり（にたり）」の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形が定型で、「うつろってしまったなあ」と訳す。断定「なり」の連用形「に」なら上は体言・連体形に付くので、ここはあてはまらない。

問2 直前「うつろひ」は四段動詞「うつろふ」の**連用形**。連用形に接続する「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形であり、断定「なり」（連体形・体言接続）とは接続が異なるため、完了と判別できる。さらに直後が「けり」で「〜てしまった」と訳せることも決め手。

問3 四段動詞「なる」の連用形（動詞）。「遠くなりぬ」で「遠くなる」の意。

問4 直前「遠く」は形容詞「遠し」の連用形であり、用言（形容詞）に「なり」が下接して「（〜く）なる」と状態変化を表す。断定の助動詞「なり」は体言・連体形に接続するので、形容詞連用形「遠く」に付く「なり」は動詞だと分かる。

問5 ウ（形容動詞「いかなり」の活用語尾）。「いかなり」で一語の形容動詞（ナリ活用）であり、助動詞「なり」ではない。

問6 推量の助動詞「む」。ここでは話し手の**意志**（〜よう）。「詠まむ」で「詠もう」。

問7 この「なむ」は**係助詞**。係助詞「なむ」は文中の語を強調し、文末（ここでは「む」）を**連体形**で結ぶ（係り結び）。だからこそ文末「む」が連体形になっている点が結びの証拠。

問8 イ（自発の助動詞「る」の連用形）。「おどろかれぬる」で、知覚動詞「おどろく（はっと気づく）」に自然と心が動く意の「る」が付いた形。

問9 「おどろく」は「自然にはっと気づく・目が覚める」という、意志によらず心が動く知覚動詞。こうした知覚・思考の動詞に付く「る／らる」は**自発**になりやすい。受身（〜される相手）も可能（〜できない否定文脈）も文脈にないため自発と判断する。

問10 ウ（強意（確述）の助動詞「ぬ」未然形＋推量「む」）。「栄えなむ」は「きっと栄えるだろう」。

問11 直前「栄え」は下二段動詞「栄ゆ」の**連用形**。連用形に接続する「な」は完了・強意の助動詞「ぬ」の未然形であり、それに推量「む」が付いた「なむ」。係助詞「なむ」なら上は連用形に限らず種々の語に付き文末を連体形で結ぶが、ここは「連用形＋なむ」かつ「きっと〜だろう」の意なので確述（強意）＋推量と分かる。

問12 完了の助動詞「ぬ」の**終止形**。「人皆寝ぬ」で「人は皆寝てしまった」。

問13 打消の助動詞「ず」の**連体形**「ぬ」。「知らぬ人」で「知らない人」。

問14【記述】 ⑦は直前「寝」が下二段動詞「寝（ぬ）」の連用形であり、連用形＋「ぬ」かつ文末（終止）なので完了の助動詞「ぬ」の終止形。⑧は直前「知ら」が四段動詞「知る」の未然形であり、未然形＋「ぬ」かつ直後が体言「人」なので打消「ず」の連体形「ぬ」。すなわち**上が連用形なら完了、上が未然形なら打消、**さらに**直後が体言なら連体形＝打消、文末で言い切れば終止形＝完了**という二点で見分ける。

問15 ア（過去の助動詞「き」の已然形の一部）。「聞こえしか」は文中の係助詞「こそ」を受けた係り結びで、過去の助動詞「き」が已然形「しか」の形で結んだもの。傍線部「し」はその「しか（＝過去『き』の已然形）」の一部であって、副助詞でも形容詞語尾でもサ変動詞でもない。直前「聞こえ」が連用形であることも、連用形接続の過去「き」と合致する手がかり。

問16 イ（主格＝〜が）。「山の見ゆる」で「山が見える」。連体形「見ゆる」が下に続き、「の」が主語を示しているので主格。

問17 格助詞「が」で、ここでは**主格**（〜が）。「わが待つ人」は「私が待つ人」。⑩の「の」と同じく、下に用言（連体形）を伴って主語を示す主格用法である点が共通する。

問18 接続助詞「て」。直前「吹き」は四段動詞「吹く」の**連用形**で、連用形＋「て」は単純接続（〜て）の接続助詞。

問19 イ（打消の接続助詞「で」）。現代語訳「（宿にも）え帰らないで」。「で」は「ず＋て」が変化した打消接続で、未然形「帰ら」に付き「〜ないで」の意。

問20 格助詞「に」。直前「取る」は四段動詞「取る」の**連体形**で、「取るに」は「取っていると／取ったところ」の意。①の「に」は完了の助動詞だったが、⑭は連体形＋「に」で動作の時・場面を示す格助詞（接続助詞的用法）であり、助動詞ではない点が異なる。

問21 断定の助動詞「なり」の終止形。直前「人」は**体言**であり、体言に接続する「なり」は断定（〜である）。③は形容動詞の語尾だったので異なる。すなわち⑮は③とは別物で、体言接続の断定「なり」である。

問22 接続助詞「を」。「梅咲きたるを」で「梅が咲いているのを（＝が、ところ）」と、前後の事柄をつなぐ働き。連体形「たる」を受け、下に文が続くため格助詞（目的語を示す）ではなく接続助詞と判断する（文脈により逆接・単純接続）。

問23 上一段動詞「見る」の連体形の一部「る」。「見る」は上一段活用で「み・み・みる・みる・みれ・みよ」と活用し、傍線部「る」は連体形「みる」の活用語尾。受身・自発などの助動詞「る」は四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に接続するが、ここは上一段「見」に続いており接続の形が合わないため、助動詞ではなく動詞活用語尾だと分かる。

問24 （現代語訳）「風が吹いて、波が荒くなってしまった。」

問25 （現代語訳）「日は暮れてしまったけれど、宿にも帰ることができないで、つらく思う（思い悩む）。」

問26【記述】 ②の「なり」は形容詞連用形「遠く」（用言の連用形）に接続する動詞「なる」であり、「〜くなる」と状態変化を表す。一方⑮の「なり」は体言「人」に接続する断定の助動詞で「〜である」の意。両者はいずれも「なり」という同じ形をとるが、**上が用言の連用形なら動詞「なる」、上が体言（または連体形）なら断定の助動詞「なり」**と、接続している語の品詞・活用形によって識別できる。さらに伝聞推定の「なり」は終止形（ラ変型は連体形）に接続するので、接続を確かめれば三者は確実に区別できる。

© 誰でも古典塾　kotennosennsei.com